令和３（２０２１）年度
日本特別活動学会　第８回　実践事例募集事業

推　奨　実　践　事　例

事例番号　８－２

児童による積極的な学級づくりへの参画プロジェクトの実践
～「やってみる」と言える児童集団の育成に向けて～

（兵庫県）伊丹市立鴻池小学校　　塩家　崇生（しおや　たかお）

実践テーマ	児童による積極的な学級づくりへの参画プロジェクトの実践 －「やってみる」と言える児童集団の育成に向けて－
実践区分 ○囲み	(学級活動・ホームルーム活動)　児童会・生徒会活動　クラブ活動　学校行事 その他（具体的に、　　）
実践事例の背景、ねらい、意義など	前年度の学校評価において、自己肯定感の低い児童が多いことが本校の課題であることが明らかとなった。その状況を打破すべく、令和３年度は学校教育目標「ひとみ輝き　笑顔あふれる　鴻池小学校　―『やってみよう』と言える子どもを育てる―」を軸として、「自ら考える子」、「心豊かな子」、「たくましい子」の育成をめざし、教職員が一丸となって教育活動をおこなっている。 本研究では、６年生１学級33名を対象として、児童の自主的学級活動への興味及び関心の向上が、児童の自己肯定感や学級力の向上を図れるという仮説のもと、１年間を通して児童が中心となって学級活動をおこなうプロジェクトの実践をおこなった。 内容としては、学級活動を通して児童自身がやってみたいと思ったプロジェクトを担任が積極的に取り組ませるものである。 教師は、それを積極的に挑戦させる活動に対して、それを認め、励まし、適切な支援及び評価をおこなっていくことで、児童に「やった結果」だけではなく、「やろうと努力した過程」にも着目させていく。また、「活動あって、学びなし」とならないように、教師の見取りだけではなく、児童自身にも各アンケートや振り返り結果から自分自身や学級について考えさせていく。児童はそれらの体験を重ねていくことで、自ら積極的に取り組むことに対する達成感や充実感等を得ることができるとともに、課題も発見できる。それらを生かし、新たな活動に対する児童の意欲へとつなげていく。
実践の時期	平成・(令和)　３年４月～４年３月

【実践事例】

1　目的

本研究では児童主体による学級づくりの充実が児童の主体性を育成し、それが自己肯定感や学級力の向上につながっていることを明らかにするため、1 年間を通して自主的教育活動の実践や児童対象への意識調査等をおこない、その効果検証をおこなうことを目的とする。

2　方法

(1) 対象者

対象は、伊丹市立鴻池小学校の 6 年生 1 学級、授業及び調査に参加した対象児童は 33 名（特別支援学級に在籍している 2 名を含む）。なお、筆者が担任。筆者は、令和 2(2020) 年度より研究実施校に着任し、当校における対象児童学年の担任は、初めてである。

(2) 実施期間

2021 年 4 月から 2022 年 3 月の 1 年間

(3) 手続き

本研究では 1 年間を通して、児童は以下の取組をおこなった。

ア　教師が設定したプロジェクト活動の実施

4 月　学級目標決め及び会社活動決め
6 月　お別れ遠足企画プレゼン大会（総合的な学習の時間と関連付け）
11 月　1 年生との交流会企画（国語科及び総合的な学習の時間と関連付け）
3 月　卒業式までに学級で取り組みたい企画の募集（宿題）

イ　児童が企画したプロジェクト活動の実施

- 各担当会社が中心となっておこなうプロジェクトの企画及び運営
- 季節ごとにおこなうボランティア児童による教室掲示の工夫
- 毎週 1 回の学級活動の進行
- その他の活動の実施

ウ　自己肯定感に関連するアンケートの実施

5 月　全国学力学習状況調査
7 月　学校評価中間児童アンケート
12 月　学校評価学年末児童アンケート
3 月　これまでの調査内容と同じアンケート

エ　学級力向上に関連するアンケート調査

年間 6 回（5・7・9・10・12・3 月）　今宮信吾らが開発した学級力アンケートの実施

オ　1 年間の振り返りの実施

3 月　学級づくりへの参加、自分の意識変化、今後の自分についてのふりかえり

3　結果

(1) 教師が設定したプロジェクト活動

筆者は学級開きで、1 年間を通して達成したい学級目標を児童に考えさせた。1 年間を通して、学級児童全員で「楽しい」、「笑顔」、「明るい」、「考える」の 4 つの言葉を合言葉にし、よりよい学級づくりをスタートさせた。その後、その目標が達成できるために必要な会社を企画し、社長（起案者）が中心となって会社活動を軌道にのせていく。

教師が設定するプロジェクト活動は、あくまでも児童の心に火をつけるきっかけであると考えている。筆者は、設定はおこなったが、具体的な内容については児童に考えさせた。児童たちは、自身の得意なことを生かしたり、友達との話し合い活動を通して企画内容のアイデアが浮かんだりする中で、それぞれのプロジェクトを成功させるべく、積極的に努力する姿が見られた。以下に具体的な取組の例を挙げる。

・お別れ遠足企画プレゼン企画クラス予選(写真 1)

1 月に予定されているお別れ遠足の行き先案を児童全員に企画書を作成させた。その後、プレゼン予選に参加希望者を募った。学級児童全員の約 4 割にあたる 13 名が予選にエントリーをした。

写真 1　クラス予選の様子

参加者が企画の目的や場所設定の理由、具体的な活動プラン等についてプレゼンソフトを活用して発表をおこなった。

・1年生との交流企画にむけて（写真2）

児童自身が考えた9つの店と、劇団1つが設立された。

筆者は交流会に向けて、「相手（1年生）が楽しむこと」、「自分（6年生）も楽しむこと」、「この活動が、学校にとっても良いイベントとなること」の3点を意識するよう児童たちに伝えている。

児童たちは、実施日の約1ヵ月前から学級活動や休み時間等を活用して、計画や実施に向けた準備等を積極的におこなった。その中で、1年生が何をすればとても喜ぶのかをグループで話し合ったり、誰もが楽しめるように作成した遊び道具をさらに改善したりする等の姿が見られた。

写真2　交流企画にむけた準備

・卒業式までに学級で取り組みたい企画案の作成と実行（写真3）

小学校生活残り約20日となったところで、学級で取り組みたい企画の募集をおこなった。約1週間の間に、全部で54の企画が集まった。その中から、簡単に取り組めそうなものを企画した児童や、積極的に企画を考えてくれた児童を中心に、学級活動の時間を使ってそれを実行させていった。

また、卒業式当日にむけた学級の飾りつけを提案した児童もおり、これについては学級児童全員の活動として、教室の場所の担当グループを決め、各自でその飾りつけをおこなった。卒業式当日の学級掲示は、児童が作成したものばかりで彩られた。

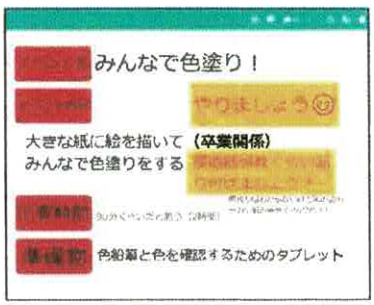

写真3　企画書の提案

(2) 児童が企画したプロジェクト活動

筆者は学級目標が決定した後、それが達成できるために必要な会社活動の案を児童に考えさせた。前学年までにやったことがある教科係や保健、手紙、配り係といった毎日することがすでに決まっている内容の会社が7社、学級新聞や、学級の飾りつけ、イベント等、自分たちのアイデアを実行に移す会社が7社の計14社が設立された。会社から「やってみたい」と担任に提案があったものは、基本的にさせてみることにした。もちろん、すべてがうまくはいかないが、児童の経験値及び学級力を上げるために必要な体験である。筆者は、この体験を一つの行事、イベントで終わらすことのないように、児童たち自身でやろうとしたことを最大限に認め、励まし、評価をおこなった。それを受けて、児童たちは自分たちの会社活動をより充実させるために工夫をし、年間を通して活動をおこなった。以下に具体的な取組の例を挙げる。

＜定期的開催プロジェクト例＞

・学級目標黒板アート（写真4）

学級目標が書かれたイラストのデザイン

・学級力見直し会（写真5）

アンケートの結果を基に、司会を中心としておこなう学級会

・笑顔プロジェクト（写真6）

自分が笑顔になったら、指定された場所に笑顔を描く企画

・学級大掲示プロジェクト（写真7）

体育大会、クリスマス、卒業に向けた学級全員を巻き込んだ学級掲示

・各学期終わりのクラスイベント企画

・学級遊び…毎週1回、休み時間に学級全員で遊ぶ企画

・5分クイズ…毎週水曜日の朝の会時に実施する企画

写真4　学級目標黒板アート

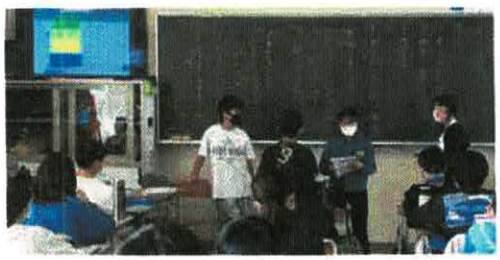

写真5　司会を中心とした学級力見直し会

写真6　笑顔プロジェクト

(3) 児童自身における意識の変化

児童には年間3回、学習意欲や学級づくり、自己肯定感等に係る学校評価アンケートを実施した。各項目における好意群の割合について、向上が見られたものは8項目中以下の5項目であった。

・何事にも前向きにチャレンジする
(7月 80%→3月 87%)

・安心できる学級であるか
(7月 87%→3月 97%)

・誰かに必要とされたい
(7月 87%→3月 94%)

・誰かの役にたつために努力する (7月 90%→3月 97%)

・道徳科授業への意欲 (7月 83%→3月 97%)

写真7 学級大掲示プロジェクト

(4) 学級力向上における意識変化

児童には年間6回、学級力に関するアンケートを実施した。児童の回答を数値化したものが表1である。どの項目においても、5月から比べると増加している。特に大きな変化(5月から20%以上増)があった項目は、「模範」、「反省」、「運営」、「新しさ」であった。

ただ、5月から課題であった「学習」や「時間」については、12月に比べ達成率が減少した。

表1 学級力アンケート結果(達成率)

	項目	5月	7月	9月	10月	12月	3月
目標達成力	設定	77	90	92	94	94	94
	模範	60	85	86	88	92	87
自律実践力	反省	74	83	84	88	88	95
	運営	73	82	89	91	88	96
対話創造力	新しさ	79	90	95	97	95	99
	合意	74	86	90	92	91	90
協調維持力	支え合い	83	94	90	91	92	92
	素直	84	87	85	90	88	87
安心実現力	平等	75	82	84	90	88	88
	尊重	68	73	78	79	84	78
規律遵守力	学習	49	71	66	65	67	61
	時間	53	70	84	82	83	70

(5) 1年間の振り返り

児童には、上記(3)(4)の結果について、卒業式の2日前に公表し、そのことについて最後の振り返りをさせた。(3)の結果からは自分自身の意識の変化について、(4)の結果からは学級づくりへの参加について自由記述させた。

他にも、「学級目標が達成できたか」や「自分たちで学級をつくっている意識はあったか」について4件法でアンケートを実施し、欠席者2名を除く全員が好意的な回答をしていた、

この振り返りのねらいは、1年間の成長についてだけでなく、中学校生活に向けた意識づけをねらいとしている。

4 考察

1年間の実践を通して、児童たちは、自分から行動することが自分だけでなく、他人や学級、学校においても影響があることを理解できたと筆者は考える。その中で重要なことは、活動後の振り返りであると考える。本研究では学校評価や学級力アンケート等を効果的に活用し、その結果を児童に振り返らせた。児童自身や学級についての強みや弱みを客観的に感じ取らせることで、意識の向上につなげることができた。ただ、学級力アンケートについては、3学期は学期末のみの調査であったため、対象学級の課題であった規律遵守力へ意識低下につながったのではないかと考える。やはり、学期途中に児童たちには、 自身の意識や学級力についてメタ認知させることが必要であると共に、教師自身も多角的な視点から、学級経営について客観的に見つめ直すことが重要である。

本年度の学校教育目標の副題である 「『やってみよう』と言える子どもを育てる」については、学級力アンケートの「目標達成力」や「自律実践力」の数値結果、1年間の振り返り結果等からその素地をつくる効果はあったのではないかと考える。しかしながら、本研究はまだ継続中である。引き続き、全国学力学習状況調査の関連項目に対する比較や1年間の振り返りにおける児童の自由記述、各アンケート結果の精緻な分析を通して、本研究の成果をより明らかにするとともに、新たに他クラスでの実践も加えたデータ検証をおこなっていく。